

## 司馬遷

岡崎文夫著

昭和二十二年十一月廿五日 弘文堂刊  
教養文庫判 一二五頁 價 二〇圓

博士が司馬遷を選んだ理由、即ち東洋史上の司馬遷の地位本書著述に於ける博士の意圖等は私が此處で淺い推測をするよりも博士御自身の筆を拜借しよう。

「思ふに司馬遷は其不朽の名著「史記」によりて千古に生きて居り、之が研究は古今東西種々の學者によつて試みられてゐる。而も猶幾多の問題が残されてゐるやうに考へられる。

若し「史記」を問題とするとなればそれは自然専門的な著述とせねばならぬが、ここでは司馬遷の爲人や思想等を主眼として之を敘述せんと思ふ。固より彼の思想は「史記」の中に求めるより外はないが然しそれは史記の分析研究を経なくても綜合的な印象により大體の輪郭を示すこと必しも不可能でない(序文)恐らく年代と事象の羅列に嫌らず又史學者として人物の抽象的抽出に興味を持たぬ博士の心の現であらう。博士の意圖する所は目次と紙數の配分を見れば更に明瞭に觀取される。

## 一總序

二司馬遷の生涯 甲、司馬遷の生立(6 P) 乙、司馬遷の宮士(10 P) 丙、司馬遷の晩年(9 P)

三司馬遷に與へた時代の影響 甲、武帝の外征(6 P) 乙、經濟的な動き(10 P) 丙、政治の動き(13 P) 丁、儒學の勃興(P 14)

四史記に就いて 甲、總序(3 P) 乙、史記製作の意圖と其方法(22 P) 丙、史記の體制(15 P) 丁、結語(7 P)

次いで各篇の筋を簡単に紹介しよう。(二)は先づ彼の家系より始り大史令たる家職への自覺と父談の遺囑によつて史記を書かんと決意した次第を述べ例の腐刑後の遷の心情を推測してゐる。

三、(甲)司馬遷が世界的な視野より各地の状態を記述し得たのは武帝の外征による中國外世界の認識の擴大に據ると言ひ(乙)次いで漢初の若々しい發展の頂上にある社會が彼の

經濟觀を生んだ現實的基礎であると説き、あわせて平準貨殖の両面からよく活寫した彼の史才を賞した(後)(丙)筆法一變して各時代の代表的人物の型を分析検討して時代の變遷と特質を求めてゐるが、此の頃は更めて史記を讀まんとする者に多大の教訓と暗示とを與へるものと思ふ。(丁)最後に始皇焚書後の儒學を略述して「詳細の事實」それ等を統一する義理の學」此の兩方を彼は當時の春秋學者及尙書學者より得たものであり、此の點は史記を理解する上に必要であると注意してゐる。然し博士の眞に云ひたいことは史學者としての遷の高い資質と見識とであらう。

四、(乙)は論旨が多岐にわたつてゐるが、大要は、信を六藝に置いて古今の書を整理綜合し春秋の意をたいして人の行爲を表章し評價して(價値の評準には差はあらうが)人間の行爲の中に、當時の常語である究天人之際(公心を以つて世界を把握する意と言ふ)、通古今之變を史記制作を通じて精しく且つ正しく顯明せんとするにあると言ふにあらう。然して博士は春秋以後の世界を歴史として始めてあの體制に整理した彼の獨創の才を高く評價してゐる。(丙)は史記以後本紀志列傳あるを正史としてゐる事及び史記の本紀世家列傳の相互關係は天に北斗あり二十八宿之に應じて天道を運行しする如く地は天に法り、天子を中心に世家列臣之を屏して國家を構成してゐる關係にあると言ふ。次いで世家以下博士の寸鐵の評をのべ(丁)結語として史記は中國史學史上獨歩の地位にあると驅つてゐる。

以上で内容紹介を擱くが博士は司馬遷が事象の奥に個人的心事を探らんとした事を強調しゐるが史記の文學中に遷の心事を探らんとする事こそ博士の一貫した態度と思ふ。

以下讀書後の感想を加へてみたい。

(1) 過去の博士の諸作品一例へば魏晉南北朝通史、支那史概説等——は博士の史觀により末端の一語まで統一整理され張切つた弦の如く、全篇脈絡一貫其の名文と相俟ち讀者をして高い内容も面白く理解(其の深淺には多大の差があつても)せしめるものであつたが本書は稍其の眞骨頂が出てゐず敘述多岐讀者を混迷さす個所がないでもない。其の理由は序文の態度にも不拘、史記をも解説しないわけにはゆかず、從つて重心が二つに分れ記述も少々重複氣味の所も出た事と敘養文庫の性質と廣い讀者層を考慮してか東洋史の常識事又は派生的な事までもいちいち原に遡つて親切に詳述して全然東洋史に對して智識を缺く者にも理解せしめんと企圖した所に多く原因するものであらう。

(2) 司馬遷に及せる當時の外征、經濟、政治、儒學の各々の影響は一應呑み込む事が出来たが各項分離されて相互の關係には及んでゐない。從つて彼を包む時代性の綜合的な觀念が中々得られず、「時代の影響」としては稍々不満足に思はれて、博士の「漢書食貨志」を讀んだ時の様な感銘が得られなかつた。

(3) 結語の部分をも更に詳述して欲しいと思ふ。例へば史記が漢書、資治通鑑に比較して獨自の存在であると言ふが獨自

の内容と理由——換言すれば彼が正史の體制を樹立して史學の祖と仰れながら實際には後世の正史は斷代史と通史の差を除いても文章史觀等に於いて多く漢書の流れを汲んでいるのは何故かと言ふ事にならうが——が知りたい。此の點こそ史記に附隨して殘された問題の重大なるものの一つであり、且つ一方廣く漢代又はそれ以後の社會、學問全般に關することだけに尙のこと博士の意見を知りたいと思ふ。

以上私の感想の大體であるが之等は教養文庫と言ふハンデが無かつたならば除去されてゐたものであらう。本書中の博士の意見は纔當で小島博士や重澤氏の説と對立するものではないが所々新見解もあり、且つは多角な司馬遷を小冊子の中に略全貌を書いた點一讀さるべき書物ではあらう。

淺薄な紹介が本書の内容を誤りつたへ批判の的外れん事を恐れつつ筆を擱く。が本書の批判とは別に史記を分解して六派の學者としての司馬遷を追究した研究も一つは必要なのではあるまいか。

〔米田賢次郎〕